第 36 回 －古代の船と航海　その2　縄文人の軌跡－

前稿で紹介した縄文中期土器の出土したエクアドルのバルビディア遺跡を１９８１年に訪れた古代史学者古田武彦は、九州有明海沿岸出土の土器群と共通する文様をもつ土器が突如出土した状況を視察・確認したが、彼はその際に他にも注目すべき問題を見いだした。それはバルビディア遺跡からおびただしく出土する土偶である。その人相は日本人には極めて親しみやすい顔をしている。しかし、日本の九州、有明海沿岸部の縄文遺跡からはこのような土偶は出土しないのである。この点、日本列島の中部やそれ以東の縄文文明と九州の文明はその質を異にしている。従って、有明文明人とバルブディア人も別の文明の上に立っているといえる。土偶を核心に持つ文明がすでにエクアドルには存在していた、その中に日本列島で発展した縄文土器が運ばれ、現地である点では相似し、他の点では相異した新たな文明となった。ところで魏志倭人伝に１年の船旅で到達すると書かれた「裸国・黒歯国」は、その方角・日程記事からエクアドルを含む南米大陸北半部に比定することが出来る。現地で検証した結果では、奇しくもバルディビア土偶は裸であり、それに続くチョレーラ土偶は黒歯とペインテッド・フェイスの風俗を示していたとのことである。

さて、縄文中期に話題は遡る。青森県の三内丸山遺跡は縄文前期から栄えはじめた、縄文中期（紀元前５千～４千年）の大集落跡である。縄文農耕の典型となる食料生産活動を行い、シンボルの巨大な六本柱タワーを建て、翡翠や琥珀なども所有する豊かな生活を営んでいた。ところがこの集落が、縄文中期のある日忽然と廃絶され、住人の全員が姿を消したのである。今日の考古学はこれを「何らかの理由により去っていった」としか説明しない。最終の氷河期の後、今日までの１万５千年間長期的に気候は安定しているとはいえ、比較的短期の変化を無視することは出来ない。三内丸山のような集落共同体が、１５００年間も栄えた定住の場でありつづけるには、食料・燃料・住居など日常生活に関するシステムが整備され、それがスムースにいっている必要があった。そこに、寒冷化・病虫害などの危機が、複合的にあるいは連続してきたりすると、それを乗り切れない事態が起こり、回復力がなくなってしまう。そこで、三内丸山の多くの人々は分散して青森平野の中の小さな舞台へと移っていった。だが、三内丸山は海に面した集落で、漁労に長けた住民には船乗りとしての航海の知識があり、つまり大量移動の手段をもっているという特徴があった。そして海に乗り出して移動したグループもあったのである。

縄文時代後期から晩期になると、東北地方から大移動してきた大量の土器が伊豆半島や伊豆諸島から出土する。また三内丸山と同様のストーンサークルも中伊豆町上白岩遺跡（４０００年～３０００年前）で発見され、同系統の文化が伝わっていたことを窺わせる。土器では神津島以北の北伊豆五島で東北地方のものと共に西日本各地の特徴ある土器が発見され、東西の土器がこの地に集合する現象を示した。三宅島では突如として東北の亀ヶ岡式土器が現れ主流となったが、当然大挙した人の移動があったものと考えられる。同時に東北の優れた漁労技術を示す遺物である鹿角製の離銛や返しつき釣針が、伊豆だけではなく、相模湾岸、駿河湾岸で出土している。しかし優れた海人である縄文人は伊豆に定住することなく去っていった。ここを基地として大型の丸木船を建造し、移動していったものと思われる。良材・河川・良港に恵まれた伊豆が造船の適地であることは、のちに日本書紀にここで官船を建造したという記事があって、記録上でも裏付けられている。

１９９０年、京都で行われた国際シンポジウムにハワイから招かれた篠遠喜彦（太平洋考古学）は、南太平洋のバヌアツ共和国で縄文土器が発見されたと報告した。バヌアツはオーストラリアの東、ニューカレドニア島の北に位置するニューヘブリデス諸島が１９８０年に独立して出来た国である。そのエファテ島のヤムイモ畑を耕しているところから出てきた土器の図版が、フランスの考古学者ジョゼ・ガランジェによるバヌアツの考古学調査論文に収載されているという。それは縄の押擦文をもった細長い独特の形をした土器で、３年後にその土器を検討した芹沢長介は縄文の円筒下層Ｃ，Ｄ式に酷似していると発表した。円筒式土器の出土地域は日本列島のなかでも東北地方北部と北海道南部に限られており、当然ながら三内丸山遺跡からも出土している。更に、バヌアツ土器の成分分析をおこなった結果、青森県出土の縄文土器と一致したという研究も発表されている。

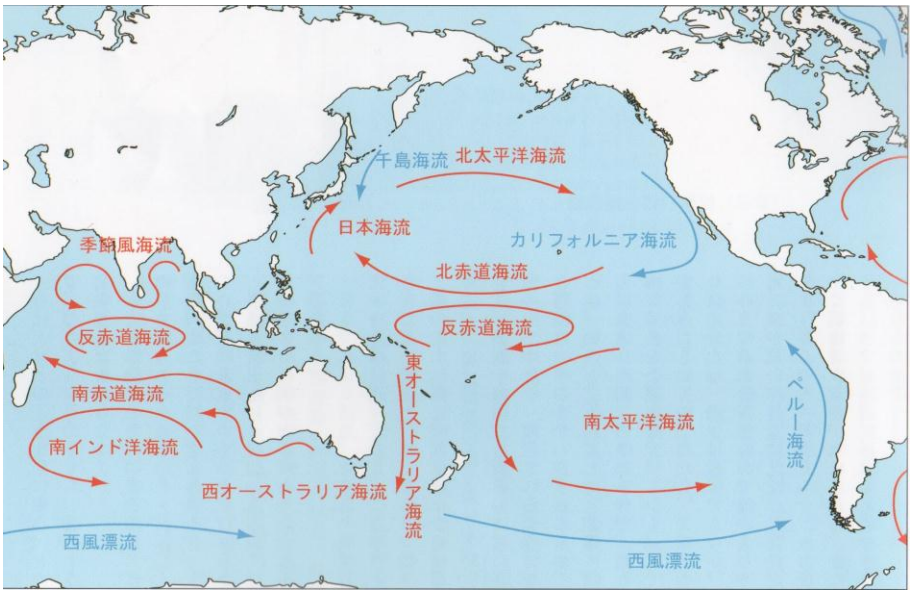
三内丸山を発掘した考古学の岡田康博は「縄文時代の商人達」という小山修三（国立民族博物館）との、縄文社会の経済体制についての刺激的な対談集（洋泉社）で、その土器について「実物を見ましたけれど、本当に紛れもない円筒土器でした。バヌアツは日本列島から、約６０００キロも離れていますが、比較的小型の土器が多いようです。土器の時代に幅がありますから、偶然に１回行っているのではなく、何回か行っているようですね。本当に６０００キロも動いたとすると、桁違いの話になる。（笑）行き来があるとすれば、難破や漂流の可能性は少ない。偶然そっちに行ったなんていうことじゃないですからね。」と述べている。

即ち、岡田は土器の年代に幅があることを根拠に何度も行ったとみており、交通線（世界大移動線）が存在したという考えに立っている。この仮説は、別の角度から釣り針を対象に研究しているスエーデンのベンクト・アネルの成果によって補強される。アネルによれば、シベリア、日本、ミクロネシア、ポリネシアの釣り針は同系列であるという。同型の釣り針が太平洋上に点々と存在すると云うことは、その点線上に交通線が存在し、人が移動し、文化（釣り針）も移動したということを意味する。

さらに紀元前２０００年紀の前半、南太平洋史に優れた航海術を持ち、土器文明を持ったラピタ人という集団が登場する。出土した人骨は明らかにモンゴロイドの特徴を備え、入れ墨の道具が出土しているところから、その習慣を有したことがわかっている。ラピタ遺跡の所在地点を結ぶと、長いオビ状の広がりに分布していて、その西端はニューギニア北部の沿岸地帯で、東端は西ポリネシアである。すなわち、分布域はビスマルク、ソロモン、サンタクルス、ニューヘブリデス、ニューカレドニアなどの諸島を数珠つなぎにし、南東方面に伸び、さらにニューヘブリデスから東方に延びて、フィジーや西ポリネシアの島々へと続いている。ラピタ人はこれだけ離れた島々へと、同じような栽培植物や家畜のセットを備えて、拡散している。比較的短期間に拡散したといわれているところから、これは偶然の拡散ではなく、計画的な拡散であると考えられる。ラピタ人たちは、ニューヘブリデス諸島を根拠地にして、ポリネシアへの旅に出た。一方、ニューヘブリデス諸島では、縄文土器が見つかっている。最近の研究では、ポリネシア人と東アジア人は血液型やDNA 多型、ミトコンドリアの九塩基の欠損した「アジア人特有型遺伝子」、Gm 型の標識遺伝子、HLA 型など共通性が大きい。そしてそれは「縄文人などの採集・狩猟民に見られるプロポーション」にも当たるということである。そうなるとラピタ人が縄文人である可能性が大きくなってくる。

本稿では伊豆半島・伊豆諸島から南太平洋へと旅立った縄文人の軌跡（交通線）について述べた。この交通線は双方向的であるとともに、更にこれ以外にも二つの主要な交通線（世界大移動線）が日本列島から北方及び南方に向かって存在したことがわかっている。これらの交通線は同時に最も古い、交易或いは情報伝達の経路としても機能していたと見られる。北方へは、北海道からユーラシア大陸や北アメリカ大陸へ渡った縄文人の軌跡がある。宗谷岬から樺太にわたり、大陸のアムール河河口に船を進めるのがシベリアへの最短距離である。また、根室から千島列島伝いに北上し、カムチャッカ半島経由でベーリング海峡を渡るか、アリューシャン列島沿いに東進するか、北アメリカ大陸に渡るには二つの経路がある。その出発点は小樽周辺であった形跡がいろいろと残っている。南方へは琉球列島、台湾、フィリピン、インドネシアまでのルートは容易に想像がつくところであるが、それがインド洋を横断してマダガスカルまで伸びているとは意外である。このルートに添う地域は言語学的に明らかな関連性を示しているとのことである。

弥生時代への変革の圧力に押されて、縄文人の一部は日本列島を去り、海を隔てた世界へと移って行った。だが、日本列島に止まり米作りを習得した縄文人も多かった、また琉球王国を開いて、得意の航海術を活かし交易国家を築いたり、北方ではアイヌ民族となって独自の文化を今日に伝えた縄文人もいる。ここで今一度特筆すべきは縄文人が海人であり、優れた航海民であったことである。



●図　太平洋・インド洋の海流

（岡野　実）

文献　1．古代は輝いていたⅠ　古田武彦　ミネルヴァ書房　（２０１４）
2．縄文人はるかなる旅の謎　前田良一　毎日新聞社　（２００３）